慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	冷戦後の国際関係理論 (二・ 完)
Sub Title	International relations theories after the cold war: The state of the field report (2)
Author	赤木, 完爾(Akagi, Kanji) 今野, 茂充(Konno, Shigemitsu)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2000
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.73, No.11 (2000. 11) ,p.25- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20001128-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

冷戦後の国際関係理論（二・完）

赤木完爾
今野茂充

はじめに
一　冷戦終結と国際関係理論
（一）　冷戦後の世界像をめぐる議論
（二）　冷戦終結と国際関係理論
二　ネオリアリズムの斜陽と競合する理論・アプローチ
（一）　ネオリベラル・インスティテューショナリズム
（二）　国内要因重視論
（三）　コンストラクティヴィズム
（四）　外交史研究
（五）　パラダイム論……（以上七三巻一〇号）
三　リアリズム内部の論争
（一）　リアリズムとは何か
（二）　リアリズム内部の論争
（三）　攻撃的リアリズム
（四）　防御的リアリズム
（五）　ネオクラシカル・リアリズム
おわりに
（一）　国際関係理論における区分の曖昧性
（二）　合理性の前提
（三）　国際システムの性質……（以上本号）

三　リアリズム内部の論争

前節で検討したとおり、主としてネオリアリズムに向けられたリアリズムへの批判は、ネオリアリズムの長短を明らかにするとともに、様々な問題点を提起した。このような批判が行われているなか、リアリストたちは、この数年間、古典的リアリズムの再評価を進めつつ、ネオリアリズムの理論的前提について再検討することを通じて、リアリズムの再構築の作業を活発におこなってきた。ここでは、リアリズム内部の論争（intra-realist debate）ともよばれる、こうしたリアリズム再構築の動きを、攻撃的リアリズム（offensive realism）と防御的リアリズム（defensive realism）の論争、ならびにネオクラシカル・リアリズム（neoclassical realism）の試みを概観することにより把握したい。まず、国際関係理論におけるリアリズムの基本について再確認し、リアリストが共有している六つの中心的前提（core assumption）について確認することから始めよう。

（一）　リアリズムとは何か

一般的に「リアリズム」とは、現実をあるがままに理解するという意味である。しかし、国際関係理論におけるリアリズムが、現実の国際関係に最も近いという認識を研究者たちが共有しているわけではない。国際関係理論におけるリアリズムは、単一の理論ではなく様々な理論の集合体であり、一種のパラダイムを形成している枠組みと捉えるべきものである。[1] それは、ロバート・ギルピンが指摘するように、科学的な理論ではなく哲学的な立場と理解する必要があり、リアリズムに対抗してきたリベラリズムやマルクス主義と同様に、反証可能性の有無を検証されるべき対象ではない。[2] リアリズムは科学的な手続きにしたがって証明されるものでも反証されるものでもないのである。

国際関係論としてのリアリズムの誕生は今世紀に入ってからのことである。[3] その思想的・哲学的起源は少なくとも古代ギリシアのトゥキディデスの時代までさかのぼることが可能であり、その思想および世界観は、政策決定者に堅実な行動指針を提供する実践的なアプローチとして時代を越えて多大な影響を与えてきた。[4] こうした伝統を背景に、現代のリアリストも、古代ギリシアから脈々と続く思想的伝統や歴史的系譜を引照して、自らの正当性を主張することについてまったく躊躇していない。[5]

リアリズムは、多様な思索の集合体と考えるべきものであり、リアリスト同士であってもすべての意見が一致しているわけではない。しかし、意見の相違はあるにせよ、[6] 古典的リアリズム、ネオリアリズムから、もっとも最近の論議であるネオクラシカル・リアリズムにいたるまで、リアリズムの諸理論においては、少なくとも以下の六つの中心的前提が共有されている。[7]

第一の前提は、国際システムの秩序原理がアナーキーであるということである。[8] 国際システムには、協定を強要したり、武力の行使を防止したりする世界政府や普遍的な統治機構が存在しない。したがって、国際政治は、政府が支配の正統性と統治能力を独占している国内政治とは、根本的に異なる。

第二の前提は、国際システムにおける最も重要なアクターが国家であるということである。これは、個人の自由の実現という価値から出発するリベラリズムに対し、リアリズムの先駆者たちが集団間の抗争をその思索の中心に置いてきたことを反映している。したがって、よりリアリズムの思想的な系譜に忠実に定義するならば、「領土を持った組織体（territorially organized entities）」とすることも可能であり、古代ギリシャの都市国家から現代の国民国家までを適用範囲に含めることができる。[9]

第三の前提は、国際システムが国家の国際舞台での行動に強い影響を持っていることである。これは、国際システムにおける国家間の相対的なパワーの分布状況が、国家の対外行動に強い影響を与えるということである。[10]

ただし、リアリズムに対するいくつかの批判とは異なり、リアリストたちは、国家の行動を規定する要因としての国内的な変数の存在を否定していない。[11] 後述する防御的リアリストの一部は、むしろ理論の補助的な前提（auxiliary assumption）として国内的な要因の重要性を積極的に主張している。[12] ただし、国際情勢の帰結や国家の対外政策を決定する唯一の要因が国内要因であるとする議論については、すべてのリアリストが否定しており、この点は古典的なリベラリストとは大きく異なっている。

第四の前提は、国家は相対的な安全保障の強化もしくはパワーの最大化を目指す合理的な主体であるということである。ここで「合理的（rational）」という語について確認しておく必要があるように思われる。リアリストが想定する国家が合理的な行動をとったとしても、必ずしも成功するわけではない。[13] すなわち政策決定に必要とされる重要な情報は、必ず入手できるものではないし、仮に入手できたとしてもそれが正確であるかどうかはわからない場合も多い。したがって、ここで言う合理的な主体という意味は、与えられた条件下で国家は合理的な行動をとるという意味であり、誤算によって政策は失敗することがあるし、数理モデルが完全情報下で想定するような合理性を国家が保持できることが前提とされているわけではない。

第五の前提は、人間の理性は、国際システムが競争的であるという根本的な性質を完全には越えることができないということである。[14] リアリストが想定する世界の下では、国家間の関係は生来的に競争的であり、国家は地位や国力に強い関心を持ち、他国との相対的な関係を懸念する。したがって、リアリストは、国際制度によって国際システムの根本的に競争的な性質を克服することが可能であるとする議論に対しては、懐疑的な立場をとっている。[15]

第六の前提は、国益を守るため、もしくは安全保障を確保するために武力を用いることについて、その効用を認めている点である。リアリストが想定する国際システムでは、その頻度は異なるにせよ常に戦争が勃発する可

能性が存在し、武力が他の外交手段よりも効果を持つケースが少なくはないのである。

以上のような六つの前提をリアリストは共有しているが、どの前提に重点を置くかはそれぞれの研究者によって異なっており、それぞれのリアリストは、問題意識や関心に応じて、さらに補助的な仮説を設定して議論を展開している。[16] そして最終的に研究者が自身をリアリストであると自覚させるものは、ギルピンが述べたようにその哲学的、思想的立場であって、分析の対象によって決定されるものではない。

（二）リアリズム内部の論争

冷戦終結を契機としてネオリアリズムの支配的な地位が揺らぐともに、様々な理論やアプローチから批判が集まったことは前節で論じたとおりである。こうした批判が行われるなか、リアリストたちによるネオリアリズムの見直し作業も着実に進められ、攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの論議を中心としたリアリズム内部の論争とよばれる大きな論争に発展した。[17] この論争は、合理主義対コンストラクティヴィズムの論争軸と並び、冷戦後のアメリカの国際関係理論における大きな論争軸の一つであるとされている。

このリアリズム内部の論争は、攻撃的リアリズム対防御的リアリズムの論争、ならびにネオクラシカル・リアリズムをめぐる論議とに大きく分けることが可能であるが、その特徴は、リアリスト達の間で古典的リアリズムの再評価が行われつつ、ネオリアリズムの見直し作業が進められた点や、リアリスト理論を考える上での分析レベルの問題（level of analysis problem）について再検討が行われたことである。[18] ショーン・リン＝ジョーンズが指摘するように、リアリズムが圧倒的に優勢なアメリカの国際関係理論研究において、どのリアリスト理論が最も説明能力を有しているのか競い合うことは、研究の発展上、極めて重要であるし、この論争から生まれた議論が現実の外交政策に多種多様な含意を持っているという点においても、この論争には様々な意義があるといえ

表 1　攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの比較

	攻撃的リアリズム	防御的リアリズム
戦争の原因	・国際システムの制約 ・リビジョニスト国家の存在	・国際システムの不確実性 ・セキュリティ・ジレンマの存在 ・攻撃・防御バランスにおける攻勢優勢
因果論理	国際システムの制約 ↓ 国家の意図を制限する要因 （パワー、国家の国内資源の動員能力など） ↓ 国家によるパワーの追求*	国際システムの不確実性 ↓ システムの不確実性を緩和する要因 （国内要因、攻撃・防御バランスなど） ↓ 国家による安全保障の追求
国際システムの制約	強い	必ずしも強くない
国家の目的	相対的パワーの最大化の追求*	安全保障の追求

＊　シュウェラーの理論では、相対的パワーの最大化を追求する国家と安全保障の追求を求める国家の両方が想定されている。

よう。[19]

ところで、リアリズム内部の論争において、最も重要と言われてきたのは、攻撃的リアリズムと防御的リアリズムをめぐる論争である。両者の大きな相違点は、国際システムの制約とそれに対する国家の反応の捉え方についてであり（表1を参照）、国際システムの制約の下で国家が安全保障を達成するために、相対的なパワーの最大化をはかるのか、それともそうではないのかという点について根本的な違いが両者には存在する。ただし、論争が開始されてから十年近くが経過した今となっても、どのような理論的要件を満たせば攻撃的リアリズムもしくは防御的リアリズムであるのかということについて、ある程度の了解は存在するものの、厳密な定義が確立するに至っていないのが現状である。[20]

しかし、攻撃的リアリズムと防御的リアリズムが、国際情勢の帰結と特定の国による特定の外交政策に対して異なる予測を行っていることの意義は大きいと思われるし、この十年間の間に行われた攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの論争の中から生まれた数多くの理論は、高く評価すべきものも多く（表2を参照）[21]、国際関係論におけるリアリズムの発展にこの論争が果たした役割は非常に大きい。それでは、攻撃的リアリズムと防御的リアリズム

表2　攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの主要な理論*1

	攻撃的リアリスム(Offensive realism)	防御的リアリズム（Defensive realism）
国際情勢の帰結を説明する理論(Theories of international outcomes)	攻撃的リアリズム（Offensive realism） ジョン・ミアシャイマー 覇権理論（Hegemonic theory） ロバート・ギルピン	勢力均衡理論（Balance-of-power theory） ケネス・ウォルツ、ジョセフ・グリエコ 脅威の均衡理論（Balance-of-threat theory） スティーフン・ウォルト 偶発性のリアリズム（Contingent realism） チャールズ・グレーサー 動態的差違理論 (Dynamic differentials theory) テール・コープランド 安全保障のジレンマ（Security Dilemma） ロハート・ジャーヒス
外交政策の理論(Theories of foreign policy)	国家中心のリアリズム (State-centered realism) ファリード・ザカリア 戦争目的の理論(Theory of war aims) エリック・ラフス 利益の均衡理論*2 (Balance-of-interests theory) ランドール・シュウェラー	防御的リアリズム（Defensive realism） ジャック・スナイダー 攻撃・防御バランス理論 (Offence-Defense balance) スティーフン・ウァン・エヴェラ 勢力均衡論（Balance-of-power） バリー・ボーゼン 国内動員理論 (Domestic mobilization theory) トマス・クリステンセン

＊1　研究者の立場によっては、攻撃的リアリスムと防御的リアリスムの分析レヘルをシステムレヘルに限定する場合もあるか、表2は論争の全体像把握のために広く捉えている。
＊2　註20を参照。

は具体的にどのようなリアリスト理論であるのか。

(三)　攻撃的リアリズム

攻撃的リアリズムは、古典的リアリズムによるパワーの強調と悲観論を共有しているが、ウォルツのネオリアズムの構造的な論理にもしたがっているリアリスト理論である。[22] ただし、攻撃的リアリズムでは、ウォルツのネオリアリズムとは異なり、国家が安全保障を確保する最良の方法は、競争的な政策によって相対的なパワーを最大化することである。つまり、攻撃的リアリズムでは、ウォルツのネオリアリズムよりも国際システムの制約を強く捉え、国家間の関係をより競争的に捉えているのである。

典型的な攻撃的リアリストとされる

ミアシャイマーは、攻撃的リアリズムの理論的前提について以下のように説明している。[23] 第一に、国家の目標において安全は常に最上位に位置する。完全な覇権が達成された場合、アナーキーは階層に変化するが、この実現性の低い例外を除き、国際システムは常にアナーキーであり、このような国際システムの下では、国家の目標は常に安全の追求である。第二に、国際システムの中においては、現状維持国家は存在し得ないということである。つまり、アナーキーな国際システムの下では、その制約の厳しさゆえに常にリビジョニスト国家しか存在しないのである。第三に、征服はしばしば引き合うということである。[24] 征服のコストの過大さを誇張する批判とは異なり、リビジョニスト国家は、歴史の中でしばしば目標を達成している。第四に、国家は、現在の秩序が安定していようが、不安定であろうが常にリビジョニストであり、潜在的な敵よりも多くのパワーを得るべく行動することである。ミアシャイマーは、アナーキーな国際システムの制約を極めて強く捉えており、安全保障は常に希少なリソースであるとしている。そしてこのような国際システムの下では、他国の意図を決して正確には把握できないし、他国の将来の方向性は常に不確実であるため、国家は安全を確保するために、常に与えられた環境下で合理的な戦略をとり、相対的パワーの最大化を通じて安全を達成しようとするのである。ただし、このような攻撃的な意図は常に達成されるというわけではない。

ミアシャイマーと同じ攻撃的リアリストと分類されることもあるシュウェラーは、他の攻撃的リアリストより、バランスのとれた理論を提示している。一九九四年に発表した論文のなかで、利益のためにバンドワゴンする国家を描いてみせたことで、シュウェラーの理論は攻撃的リアリズムに分類されるようになったが、[25] 国際システムの制約をミアシャイマーらよりも柔軟に捉えており、多くの古典的リアリスト達と同様に、国家を、相対的なパワーの最大化を求めるリビジョニスト国家と、最低限の安全保障のみを得ることができれば十分とする現状維持国家とに国家を分類している。このシュウェラーの「利益の均衡理論（Balance-of-interests theory）」は、シス

テムレベルでの能力の分布および国家の目的と、国家の目的を達成するためのコストの計算というユニットレベルの観点から、国家の行動を説明する理論であり[26]、今日では後述するネオクラシカル・リアリズムの中心的な理論の一つであるとされている。

（四）防御的リアリズム

一方、防御的リアリズムは、攻撃的リアリズムと比較して国際システムの制約をより柔軟に考えており、安全保障は必ずしも希少なリソースではなく、時には豊富なリソースになる局面が存在することも想定しつつ、理論構築を行っている点が大きな特徴である[27]。防御的リアリズムが想定する世界では、安全保障が必ずしも希少なリソースではないと想定されているため、国家が安全保障を達成するために、攻撃的リアリスト達が想定するように相対的パワーの最大化を図る必要はない[28]。したがって、穏健な外交政策が国家の安全保障を達成する最良の手段となることも防御的リアリストの想定する世界では珍しいことではない。また、防御的リアリズムの世界では、基本的に戦争は非常にコストの高い手段と考えられており、攻撃的リアリズムの世界における国家が常に戦争の可能性を考えていることと比較すると、防御的リアリストは、戦争の可能性を低く見積もっているとも言える。

しかし、国際システムの制約が必ずしも強くはなく、安全保障が常に希少なリソースではないからといって、国家が容易に平和を謳歌できるわけではない。防御的リアリストは、国際システムにおける不確実性の存在に大きな関心を払っており、自国の安全を高めることが他国にとっては脅威となってしまうという安全保障のジレンマの論議や[29]、それに関連する「攻撃・防御変数（offense-defense variables）」の論議の重要性を、これまでのリアリスト以上に強く主張している[30]。

つまり、防御的リアリズムの想定する世界においても、国際システムの不確実性によって、国家は他国の意図

を正確に知ることが困難であることから、「攻撃・防御変数」の論議とも関連し、安全保障のジレンマが大きな問題となる局面も決して少なくはない。そして時には、第一次世界大戦勃発時のように、各国が致命的な誤算をしてしまい、その結果、戦争が勃発してしまうような事態も想定されるのである。[31]

また、攻撃と防御の区別が可能である世界の方が、区別が不可能である世界よりも安定的であるし、攻撃・防御バランスにおいて、防御が優勢な世界の方が、攻撃が優勢な世界よりも安定的であるという前提も防御的リアリズムの中心的な前提である。[32] さらに、地政学的な要因をはじめ、様々な要因によって戦争の可能性が緩和されることが防御的リアリズムによって想定されている。[33]

このように防御的リアリズムにおいては、国際システムの不確実性をゼロにはできないまでも緩和する局面が想定され、国際システムの制約は必ずしも強いものではない。また、基本的に、防御的リアリストの想定する国家は、現状維持の確保以上の野心を持たない安全保障追求国家（security seeker）と仮定されており、その意図は極めて防御的である。[34] なお、防御的リアリズムにおいて、戦争が発生する確率が例外的に極めて高い状況として考えられているのが、攻撃・防御バランスにおいて攻撃が優勢な世界であるが、彼らによれば歴史上の多くの時期は、攻撃と防御の区別が困難であるか防御が優勢な時期であり、攻撃が明らかに優勢であった時期は、フランス革命からナポレオン戦争にいたる時期など限られた期間においてのみである。[35]

（五） ネオクラシカル・リアリズム

攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの論争が続くなか、一九九七年頃から、ネオリアリズムの次世代の統一的なリアリズムの枠組みを構築しようとする動きが顕在化してきた。[36] そのなかで、アメリカの学界で名が定着しつつあるのが、ギディオン・ローズが命名したネオクラシカル・リアリズムである。[37]

ローズによれば、ネオクラシカル・リアリズムでは、明示的に外部変数（システムレベル）と内部変数（国内レベル）が一体化されており、各国の外交政策は、システムの制約に大きく規定されることが想定されているが、そのシステムの制約は、ユニットレベルの仲介変数（intervening variable）によって変化することから、その影響は直接的ではなく複雑であると議論が進められる。[38]

ネオクラシカル・リアリズムが出てきた背景には様々な理由が考えられるが、その最大の理由は、ウォルツのネオリアリズムが厳格な国際政治の理論であり、特定の外交政策や歴史的事象を理論の説明の対象外としてしまってきたことである。[39] ネオクラシカル・リアリストと分類されるリアリストは、ウォルツの国際システムの構造とその帰結に関する視点は保持しつつ、システムレベルの現象よりも外交政策を重要視していた、ウォルツ以前の古典的リアリストの業績についても再評価を行い、第一イメージと第二イメージの分析レベルを自らの理論に組み込んだのである。つまり、ネオクラシカル・リアリズムとは、古典的リアリストの英知を取り入れつつ、ウォルツのネオリアリズムからもシステム分析の視角を引き継ぎ、システムレベルの要因と国内レベルの要因を一体化することを試みたリアリスト理論なのである。

ネオクラシカル・リアリズムが、リアリズムの中で新しいと思われる点は、理論構築を行う際に、現実の国際関係における具体的な問題に焦点を当てようとするアプローチを研究者がとっている点であり、具体的には、①既存のリアリズムが問題としていた論議に取り組み、それを拡大しようと試みている点、②一般理論の検証や仮説の設定のために事例研究の方法を採用している点、③第一イメージ、第二イメージ、第三イメージの統合をはかっている点、④国家行動と外交政策に関する重要な問題をテーマとしている点、の四点である。

そして、ローズがネオクラシカル・リアリストであるとした四人の研究者が研究のテーマとしているのは、①どのような条件下で、国家はその政治的利益を海外へと拡大し、また、どのように国家はその相対的なパワーの

変化を評価し適応していくのか（ファリード・ザカリア）[40]、②国家の対外的な行動と国内政治にはどのような関係があるのか（トーマス・クリステンセン）[41]、③政策決定に携わる政治的エリートは、どのように国際政治におけるパワーを認識して政策を考えているのか（ウィリアム・ウォルフォース）[42]、④国家はどのようにして外部環境の脅威と機会に対応するのか。また、その際にはたして異なった方法で異なった対応を示すのかどうか（ランドール・シュウェラー）[43]、といった問題であり、その主要な関心は、外交政策における相対的パワーの影響力にあるといえる[44]。

ネオクラシカル・リアリズムの大きな特徴は、外交政策の理論として、理論的な簡潔性を残しつつも大きな説明能力を保持している点や、方法論的にも過度に科学性を求めず、理論を念頭に置きつつも叙述的に分析が行われている点であろう[45]。しかしながら、今後の理論的発展の行方については不透明な点も多く、今後の研究の推移を見守る必要がある。

（1） Benjamin Frankel. “Restating the Realist Case: An Introduction,” in Benjamin Frankel, ed., *Realism: Restatements and Renewal* (London: Frank Cass, 1996), p. xiii.

（2） Robert Gilpin, “No One Loves a Political Realist,” in Frankel, ed., *Realism*, p. 6; Gilpin, “Richness of the Tradition of Political Realism,” in Robert O. Keohane, ed., *Neorealism and Its Critics* (New York: Columbia University Press, 1986), p. 304.

（3） 国際関係理論におけるリアリズムの誕生の経緯および初期のリアリズムの発展については、Stephano Guzzini, *Realism in International Relations and International Political Economy: The Continuing Story of a Death Foretold* (London: Routledge, 1998); Miles Kahler, “Inventing International Relations: International Relations Theory After 1945,” in Doyle and Ikenberry, eds., *New Thinking in International Relations Theory*, pp. 20-53 などを参照のこと。

（4） マイケル・J・スミス（押村高他訳）『現実主義の国際政治思想 ――M・ウェーバーからH・キッシンジャー

まで』（垣内出版株式会社、一九九七年）、七ページ。

（5）したがって、現代のリアリスト達の議論を検討する際にも、過去のリアリズムの先駆者達について検討することは非常に有用なことである。リアリズムの思想的系譜については、以下の文献を参照のこと。Michael W. Doyle, *The Ways of War and Peace* (New York: W.W. Norton & Company. 1997), part 1; Benjamin Frankel, ed., *Roots of Realism* (London: Frank Cass, 1996).

（6）この点は、また反リアリスト陣営に批判される点でもある。リチャード・ネッド・リボーは、どのような出来事に対しても、少なくとも様々なリアリスト理論のうちの一つにより説明可能であることについて、こうした競合する様々なリアリスト理論が、リアリズムそのものを反証不可能なものにしていると批判している。なおリボーが例として挙げているリアリスト同士が競合する重要な争点は、国際システムの戦争になる可能性の強弱（war-prone system）、二極と多極のどちらが安定なのかという議論、核兵器の重要性とその帰結、および国家の行動をパワーが規定する度合、という四点である。Lebow, "The Long Peace, the End of the Cold War, and the Failure of Realism," p. 24.

（7）六つの前提を提示するにあたっては、以下の文献を参考にした。Michael Mastanduno and Ethan B. Kapstein, "Realism and State Strategies After the Cold War," in Ethan B. Kapstein and Michael Mastanduno, eds., *Unipolar Politics: Realism and State Strategies After the Cold War* (New York: Columbia University Press, 1999), pp. 1-27; Randall L. Schweller, "New Realist Research on Alliance: Refining, Not Refuting Waltz's Balancing Proposition," *American Political Science Review*, Vol. 91, No. 4 (December 1997), pp. 927-30; Randall L. Schweller and David Priess, "A Tale of Two Realisms: Expanding the Institutions Debate," *Mershon International Studies Review*, Vol. 41, Supplement 1 (September 1997), pp. 1-32; Frankel, "Restating the Realist Case"; Hans J. Morgenthau, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, 5th ed. (New York: Alfred A. Knopf, 1973).

（8）リアリストによるアナーキー論とアナーキーの概念については、土山實男が詳細な検討を行っている。土山實男「アナーキーという秩序――国際政治学におけるリアリスト理論とその批判」『国際法外交雑誌』第九六号巻三号（一

九九七年八月）、二五―六四ページ。

(9) Mastanduno and Kapstein, "Realism and State Strategies After the Cold War," p. 7.

(10) パワーという概念は、明確なものではなく、国際関係論のなかでも曖昧な概念の一つであるとされているが、一般に、関係的パワー（relational power）と物質的パワー（material power）とに分類され、現在では、大多数の研究者が物質的パワーの方を採用している。William C. Wohlforth, *Elusive Balance: Power and Perception during the Cold War* (Ithaca: Cornell University Press, 1993), pp. 4-5. なお、関係的なパワーとは、「ある特定の争点に関して、AがBに対して命令しなければBがしないことをBにさせる能力」（ロバート・ダール）であり、物質的パワーとは、人口、経済力、軍事力、その他のリソースから計測される指標であり、能力（capability）とほぼ同義で用いられている。なおパワー概念の多様性については、以下を参照。David A. Baldwin, *Paradox of Power* (New York: Basil Blackwell, 1989).

(11) See, Paul F. Diehl and Frank W. Wayman, "Realpolitik: Dead End, Detour, or Road Map?" in Diehl and Wayman, eds. *Reconstructing Realpolitik* (Ann Arbor: Michigan University Press, 1994), p. 252; Bruce Bueno de Mesquita and David Lalman, *War and Reason: Domestic and International Imperatives* (New Heaven: Yale University Press, 1992). ネオリアリストは国内的要因を考慮しないが、国内的要因の重要性を否定しているわけではなく、ただ国際システムレベルの要因と比べて重要ではないとしているだけである。Stephen M. Walt, "Alliances, Threat, and U.S. Grand Strategy: A Reply to Kaufman and Labs," *Security Studies*, Vol. 1, No. 3 (Spring 1992), p. 473, n. 1.

(12) See, Jack Snyder, *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition* (Ithaca: Cornell University Press, 1991); Thomas J. Christensen, *Useful Adversaries: Grand Strategy, Domestic Mobilization, and Sino-American Conflict, 1947–1958* (Princeton: Princeton University Press, 1996).

(13) Frankel, "Restating the Realist Case," p. xviii.

(14) Hans J. Morgenthau, *Scientific Man versus Power Politics* (Chicago: Chicago University Press, 1946), pp. 90-95.

(15) John J. Mearsheimer, "False Promise of International Institutions," *International Security*, Vol. 19, No. 3 (Winter 1994/95), pp. 5-49.

(16) ラカトシュの科学的研究プログラムの議論が明らかにするように、理論は、理論で説明できないことに直面すると、その中心的前提の説明能力を広げる補助仮説を生み出していく。前節でも触れたとおり、ラカトシュの科学的研究プログラムの議論は、理論の評価基準の一つとして、今日のアメリカの国際関係理論でも重要な位置を占めている。ラカトシュの科学的研究プログラムの議論については、Imre Lakatos, and Alan Musgrave, eds., *Criticism and the Growth of Knowledge* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970). 科学的研究プログラムの議論を含め、哲学者としてのラカトシュについての概略は、以下によくまとまっている。Brendan Larvor, *Lakatos: An Introduction* (London: Routledge, 1998).

(17) 攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの論争を最初に提起したのは、ジャック・スナイダーであるといわれている。Snyder, *Myths of Empire*, chapter 1-2. また、リアリズム内部の論争については以下も参照のこと。Sean M. Lynn-Jones, "Realism and America's Rise," *International Security*, Vol. 23, No. 2 (Fall 1998), pp. 157-82; Gideon Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy" World Politics, Vol. 51, No. 1 (October 1998), pp. 144-72.; Stephen G. Brooks, "Dueling Realism," *International Organization*, Vol. 51, No. 3 (Summer 1997), pp. 445-77; Schweller and Priess, "A Tale of Two Realisms"; Frankel, "Recasting the Realist Case."

(18) 分析レベルの問題とは、研究のなかでどのような側面を分析の対象とするのか、また、何を分析の対象とし何を分析の対象としないのかを決定するという国際関係論における古典的な問題の一つである。リアリズム内部の論争においては、国際政治の理論と外交政策の理論のどちらを志向するか、という論点で分析レベルの問題が議論された。なお、分析レベルの問題に関する古典的な業績としては以下の文献を参照のこと。Kenneth N. Waltz, *Man, the State, and War: A Theoretical Analysis* (New York: Columbia University Press, 1959); J. David Singer, "Levels-of-Analysis Problem in International Relations," *World Politics*, Vol. 14, No. 1 (July 1961); Robert Jervis, *Perception and Misperception in International Politics* (Princeton: Princeton University Press, 1976).

また、最近の論考としては、たとえば以下を参照。Barry Buzan, “The Level of Analysis Problem in International Relations Reconsidered,” in Ken Booth and Steve Smith, eds., *International Relations Theory Today* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), pp. 198-216.

(19) Lynn-Jones, “Realism and America’s Rise,” pp. 158-59.

(20) この点は特に攻撃的リアリズムにおいて顕著である。最も厳格に攻撃的リアリズムを定義する人々は、ウォルツのネオリアリズムの構造的な論理には従いつつ、国際システム内に現状維持国家の存在を認めないミアシャイマーら少数の人のみを攻撃的リアリストとして分類するが、より広く攻撃的リアリズムを定義する人々は、国際システム内にリビジョニスト国家の存在を認めて、戦争や紛争の主要因をそこに求めるリアリズムを攻撃的リアリズムであるとしている。たとえば、国際システム内に現状維持国家とリビジョニスト国家の双方を想定しているシュウェラーの理論は、狭い定義からは攻撃的リアリズムにはならないが、広い定義からは攻撃的リアリズムである。一方、防御的リアリズムについても、曖昧な点は残る。防御的リアリスト達は、一様にリビジョニスト国家の存在に言及するが、防御的リアリズムの世界におけるリビジョニスト国家の行動は、現状を守るための最小限の安全保障の確保という防御的な意図から説明されており、ハンス・モーゲンソーやアーノルド・ウォルファーズら古典的リアリストやミアシャイマーら攻撃的リアリスト達の想定する明確に攻撃的な意図を持ったリビジョニスト国家とは異なる意味合いで用いられている。また、防御的リアリズムを国際システムのレベル（第三イメージ）に限定するという論議も存在し、現在のところ統一的な厳格な定義は存在しない。

(21) 主な業績について以下のとおりである。攻撃的リアリズムについては、Mearsheimer, “Back to the Future”; Mearsheimer, “False Promise of International Institutions”; Robert Gilpin, *War and Change in World Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981); Fareed Zakaria, “Realism and Domestic Politics: A Review Essay,” *International Security*, Vol. 17, No. 1 (Summer 1992), pp. 177-98; Zakaria, *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America’s World Role* (Princeton: Princeton University Press, 1998); Eric J. Labs, “Beyond Victory: Offensive Realism and the Expansion of War Aims,” *Security Studies*, Vol. 6, No. 4 (Summer 1997), pp. 1-49; Randall L. Schweller, “Bandwagoning for Profit: Bridging the Revisionist State

Back In,”*International Security*, vol. 19, No. 1 (Summer 1994), pp. 72-107; Schweller, *Deadly Imbalance: Tripolarity and Hitler's Strategy of World Conquest* (New York: Columbia University Press, 1998) を、防御的リアリズムについては、Waltz, *Theory of International Politics*; Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987); Charles L. Glaser, “Realists as Optimists: Cooperation as Self-Help,” *International Security*, Vol. 19, No. 3 (Winter 1994/95), pp.50-90; Dale C. Copeland, “Neorealism and the Myth of Bipolar Stability”; Robert Jervis, “Cooperation under the Security Dilemma,” *World Politics*, Vol. 30, No. 2 (January 1978), pp. 167-214; Jack Snyder, *Myth of Empire*; Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and the Roots of Conflicts* (Ithaca: Cornell University Press, 1999); Barry Posen, *The Sources of the Military Doctrine: France, Britain, and Germany between the World Wars* (Ithaca: Cornell University Press, 1984); Christensen, *Useful Adversaries* などを参照。

(22) Sean M. Lynn-Jones, “Realism and America's Rise,” *International Security*, Vol. 23, No. 2 (Fall 1998), p. 158.

(23) John Mearsheimer, “Offensive Realism,” Presented at the 1999 Annual meeting of the American Political Science Association, Atlanta, September 2-5, 1999, pp. 1-2.

(24) 征服が見合うか見合わないかというテーマに関しては、ピーター・リバーマンが実証的な研究を行っており、戦争のコストが極めて高くなったとされる二〇世紀においても、一定の条件の下では、国家が軍事的征服によって産業化された社会から、戦争のコストに見合う利益をあげることができたことを示している。Peter Liberman, *Does Conquest Pay? The Exploitation of Occupied Industrial Societies* (Princeton: Princeton University Press, 1996).

(25) Schweller, “Bandwagoning for Profit.” シュウェラーの理論が、今日のリアリズムをめぐる論議において攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの区別が必ずしも適切ではないことを示す好例であるように思われる。なお、ミアシャイマーは、現状維持国家とリビジョニスト国家は明確に判別することはできないとして、シュウェラーの論議には否定的である。Mearsheimer, “Offensive Realism,” p. 13-15.

(26) Schweller, *Deadly Imbalance*, chapter 1-3.

(27) Walt, *Origin of Alliance*, p. 35.

(28) ただし、後述するように、このことが、国家が相対利得や世界における相対的な地位の問題を懸念する必要がないことを意味している訳ではない。

(29) 安全保障のジレンマについては、以下の文献を参照。Robert Jervis, "Cooperation Under the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 30, No. 2 (January, 1978), pp. 167-214; Charles L. Glaser, "The Security Dilemma Revisited," *World Politics*, Vol. 50, No. 1 (October, 1997), pp. 171-210. また、土山實男「セキュリティ・ディレンマの国際政治理論―一九一四年・核・冷戦後―」『国際政治』第一〇六号（一九九四年五月）、七一―八九ページも参照のこと。セキュリティ・ジレンマの概念を国際関係理論の場で最初に提起したのは、ジョン・ハーツである。John H. Herz, "Idealist Internationalism and the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 2, No. 2 (January, 1950), pp. 157-80.

(30) 「攻撃・防御変数」とは、「攻撃・防御バランス（offense-defense balance）」および「攻撃と防御の区別（offense-defense differentiation）」のことであり、ジャービスによって理論的な基礎が提示された。Jervis, "Cooperation Under the Security Dilemma." なお、攻撃―防御変数を論議の中心とする攻撃・防御理論（offense-defense theory）は、ここ最近のリアリズムの論議においても中心的なものの一つである。攻撃・防御理論については、以下の文献を参照。Richard K. Betts, "Must War Find a Way," *International Security*, Vol. 24, No. 2 (Fall 1999), pp. 166-98; Van Evera, *Causes of War*, Chapter 6; Stephen Biddle, "Recasting the Foundations of Offense-Defense Theory," presented to the 1998 Annual Meeting of the APSA in Boston; Sean M. Lynn-Jones, "Offense-Defense Theory and Its Critics," *Security Studies*, Vol. 4, No. 4 (Summer 1995), pp. 660-91.

(31) 第一次世界大戦時における「攻勢至上主義（cult of offensive）」の論議は、防御的リアリズムの中心的な論議の一つである。この論議については以下の文献を参照。Van Evera, *Causes of War*, chapter 6 and 7; Scott D. Sagan, "1914 Revisited: Allies, Offence, and Instability," *International Security*, Vol. 11, No. 2 (Fall 1986), pp. 151-75; Jack Snyder, *Ideology of the Offensive: Military Decision Making and the Disasters of 1914*

(Ithaca: Cornell University Press, 1984).

(32) Jervis, "Cooperation Under the Security Dilemma," p. 211.

(33) Van Evera, *Causes of War*, pp. 160-66.

(34) 攻撃的リアリストの想定する国家が、パワーを追求する国家（power seeker）と仮定されている点と対照的である。なお、この防御的リアリズムの前提に関連しては以下のような批判も存在する。アンドリュー・キッドは、国際システム内に防御的リアリスト達が想定するように安全保障を追求する国家しか存在しないとすれば、安全保障はゼロサム的ではないため、互いに抑制することにより安全保障を確保できることは明らかであり、安全保障のジレンマも存在し得ないという論議を提起した。Andrew Kydd, "Sheep in Sheep's Clothing: Why Security Seekers Do Not Fight Each Other," *Security Studies*, Vol. 7, No. 1 (Autumn 1997), pp. 114-55.

(35) こうした論議について、必ずしも研究者の意見は一致していない。こうした研究者間の相違の原因について分析した論考として、たとえば以下を参照。Jack Levy, "Offensive / Defensive Balance of Military Technology: A Theoretical and Historical Analysis," *International Studies Quarterly*, Vol. 28, No. 2 (June 1984), pp. 219-38.

(36) 本稿でとりあげているネオクラシカル・リアリズムの他にも、たとえばスティーブン・ブルックスがポストクラシカル・リアリズム（Postclassical Realism）の出現を主張した。しかし、ブルックスの提唱するポストクラシカル・リアリズムは、国家が相対的パワーの最大化を追求すると仮定している点を除き、防御的リアリズムそのものであり、理論的に矛盾を抱えている点が問題となった。とはいえ、ブルックスの論文には可能性（possibility）と蓋然性（probability）の問題など重要な論点が多く含まれている。Stephen G. Brooks, "Dueling Realism," *International Organization*, Vol. 51, No. 3 (Summer 1997), pp. 445-77. 以下の適用例も興味深い。川崎剛「吉田路線の一般理論的根拠を求めて――ポストクラシカル・リアリズムの可能性」『レヴァイアサン』二六（二〇〇〇年春号）一三二―一四九ページ。

(37) Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy."

(38) *Ibid.*, p. 146.

(39) ネオリアリズムが外交政策の理論として使用しうるかどうかは、大きな論点の一つでもある。ネオリアリズムが

外交政策の理論として使用可能であるとする論議を提起したエルマンは、「体系的な検討が行われてこなかったにも関わらず、ネオリアリズムは外交政策を説明できないとされてきた」、とウォルツらを批判している。Colin Elman, "Horses for Courses: Why Not Neorealist Theories of Foreign Policy?" *Security Studies*, Vol. 6, No. 1 (Autumn 1996), p. 7.

(40) Fareed Zakaria, *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role* (Princeton: Princeton University Press, 1998).

(41) Christensen, *Useful Adversaries*.

(42) Wohlforth, *Elusive Balance*.

(43) Schweller, *Deadly Imbalance*.

(44) Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy," p. 155. ローズは、国家の相対的パワーの変化に注目した研究には三つの波が存在すると指摘している。第一の波は、大国間の興亡を説明したロバート・ギルピン、ポール・ケネディ、マイケル・マンデルバウムの三者であり、第二の波は、トルーマン政権期を分析したメルビン・レフラーと一九世紀のイギリスの衰退について分析したアーロン・フリードバーグである。そして、ネオクラシカル・リアリズムをそれに続く相対的パワーの変化の影響に注目する研究の第三の波であると位置づけている。Gilpin, *War and Change in World Politics*. ポール・ケネディ（鈴木主税訳）『決定版　大国の興亡――一五〇〇年から二〇〇〇年までの経済の変遷と軍事闘争』（上）（下）（草思社、一九九三年）。Michael Mandelbaum, *The Fate of Nations: The Seach for National Security In the Nineteenth and Twentieth Centuries* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988); Melvin P. Leffler, *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration, and the Cold War* (Stanford: Stanford University Press, 1992); Aaron L. Friedberg, *The Weary Titan: Britain and the Experience of Relative Decline, 1895-1905* (Princeton: Princeton University Press, 1988).

(45) Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy,", p. 168.

おわりに

これまでに検討してきたとおり、冷戦終結という転機を経て、アメリカにおける国際関係理論研究の現況は、第三イメージ中心の理論研究は残りつつも、第二イメージ、第一イメージを重視する傾向が顕著なものとなっている。リアリズム内部の論争においてもこの傾向は見られ、ウォルツが切り開いた国際システムレベルの要因の重要性という要素は残しつつも、国内レベルの要因をとりこむ一部の防御的リアリストやネオクラシカル・リアリストの論議が、リアリストの論議の中心になりつつある。

しかしながら、本稿で検討したリアリズムをはじめとする国際関係の諸理論の発展にもかかわらず、理論研究者には未だに多くの課題が残されている。むしろ最近の理論研究の発展によって、こうした課題がより複雑化している感も否めない。最後に、最近の国際関係理論研究のなかで大きな課題となっている、①国際関係理論における区分の曖昧性、②合理性の前提、③国際システムの性質、それぞれについて、議論の整理を試みることにしたい。

（一）国際関係理論の区分における曖昧性

本稿では、リアリズムの論議を中心に冷戦後の国際関係理論の研究動向を概観してきたが、その中で顕著に起きている現象が、リアリズム、リベラリズム、コンストラクティヴィズムといった理論およびアプローチの、分析対象および分析方法の多様化である。その結果、異なる理論であっても多くの共通項が存在するように見えたり[1]、同じ理論であっても多くの相違点が指摘されるようになってきた[2]。すなわち、国際関係理論における諸理論の区分が、以前と比べ曖昧になってきているということである[3]。

このような点は、近年、勢力を強めつつあるコンストラクティヴィズムについても言えることである。たとえば、冷戦の終結に関するコンストラクティヴィストの論考を比較してみると、彼らが冷戦終結の要因をゴルバチョフのアイディアの変化に求めている点は共通しているものの、ウェントは国家を中心に分析し、ソ連の政策決定過程に位置していたエリートの認識の変容を強調するトップダウン型で説明を行い[4]、クラトッチウィルとコスロースキーの研究は、ウェントとは逆にエリートではなくソ連の市民社会における認識の変容が、政策決定者に大きな影響を与えたとするボトムアップ型の説明を行っている[5]。また、ハーマンはゴルバチョフの認識変容の理由を、ソ連の国内的要因からではなく、公式・非公式の場での西欧諸国の元首たちとの会談や交渉の場における接触から説明している[6]。このように、同じコンストラクティヴィストと分類される研究者であっても、全く異なる視点から研究を進めている。三つの研究を比較すると、コンストラクティヴィズムにおいてアイディアが重要な要因として扱われていることを確認することができるが、コンストラクティヴィストにとって最も重要な論点について重大な意見の相違が存在することも明らかである。すなわち、彼らが強調するアイディアがどのように重要なのか、いかに変化するのかということについて、意見の一致が見られないということである[7]。

また、コンストラクティヴィズムの研究者を中心に、八〇年代に強く対立していたネオリアリズムとネオリベラリズムの統合が論じられたが、論議の争点の変化によって国際関係理論の勢力分布の構造が簡単に変化してしまうことを示す好例である。

国際関係理論研究の大きな目的は、国際情勢の帰結を説明することや、現実の外交政策課題に対して多くの選択肢を提示することにもある。このような視点から考えれば、理論の多様化はむしろ歓迎すべきことなのであるが、個別の研究対象の詳細な部分に、それぞれ異なる補助的理論を用いなければならないという事態は、理論の過度な複雑化を避け、理論を誰にでも使えるようにしておくためにはやはり避けねばならないことである。

本稿でこれまで検討してきたように様々な理論やアプローチが出現し、理論の区分がやや曖昧に見えるような状況下にある現在の国際関係理論の研究動向を把握する際に、リアリストが常にそうしているように、それぞれの研究の哲学的な出発点について再確認する必要があるように思われる。

（二）合理性の前提

国際関係理論の前提として合理性をどのように考えるかという問題は、今後の国際関係理論を考えていく上で重要である。一九八〇年代の国際関係理論の論争は、共に合理性を前提としたネオリアリズムとネオリベラル・インスティテューショナリズムによって占められていたため[8]、この点についてあまり話題になることがなかった[9]。しかし、冷戦終結後、コンストラクティヴィズムが有力な選択肢として台頭するとともに、合理的選択論の方法論としての是非という問題よりも広い範囲で、合理性を理論の中でどのように扱うのかということが問題となったのである[10]。

たとえば、合理性を前提とすることにより国家を合理的なアクターと仮定することによって、理論を簡潔で明快なものとすることができるため、理論を一般的な政策の分析道具として使用していくことがより容易なこととなるが、その一方で分析不可能になってしまう事象も少なくはない。逆に、国家を合理的なアクターとは仮定せず、合理性を前提としなければ、研究対象の細部にまで分析範囲を広げていくことができる一方で、議論が複雑化し、その結果、研究の成果を一般化することは困難となってしまうだろう。つまり、合理性を追求すれば細部に立ち入った議論は難しくなるし、合理性を前提としなければ、簡潔性が失われてしまい一般化への道が遠のいてしまうことになる。

このことは分析レベルの問題とも関係して、国際関係理論を考える上で非常に大きな問題である。合理性をめ

ぐる論争は現在も継続中である。現実の外交政策への援用を考えた場合、与えられた条件下で最善の選択肢を選択するという意味において、国家の合理性を前提として理論を構築した方が明確な論議を展開できる、と言うことができるであろう。しかしながら、合理性を前提として理論を構築することが、合理性を前提としない諸理論やアプローチと双方向的な補完関係を築くことが不可能となることを意味するわけではない。分析の対象と分析の目的に応じて、双方のアプローチを補完的に用いることが、総合的に現実の国際政治を分析する際に必要とされるからである。

（三）国際システムの性質

時代の経過とともに国際システムの性質が変化するのかどうかという問題も避けては通れない。人間は、その生来的に競争的な性質を乗り越えることができないという立場をとるリアリストは、国際システムの本質は不変であるという立場をとっているが、正反対の立場をとる古典的リベラリストは、人間の手によって国際システムの性質を変えることは可能であると論じている。[11] たとえば、リアリストが理論の中心的前提としている国際システムのアナーキーという概念についても論議の対象となっている。リアリストは、冷戦後の世界においても引き続きアナーキーという概念を用いて、国際関係を分析することに肯定的であるが、リアリスト以外の研究者のこうした論議に対する姿勢は、その立場により大きく異なっている。[12] また、冷戦終結を境に国際システムの性質が変化したのかどうかという問題も、この十年間、非常に多くの場で論争が行われたテーマである。

仮に冷戦後の国際システムの性質がそれ以前のものから変化しているとすれば、たとえリアリスト理論が冷戦終結以前の国際関係をよりよく説明してきたとしても、分析対象を冷戦後の世界とする限り、その有効性は疑わしいものとなってしまう。[13] 外交史上の事象をよりよく説明する理論が、現代の先進国間の国際関係に対しても同

様に説明能力を持ちうるか。また、先進国間の国際関係をよりよく説明する理論が、過去の外交史の事象に対しても同様に説明能力をもっているかどうか。こうした問題は、理論研究者にとって今後取り組むべき大きな課題となっている。(14)

（1）防御的リアリズムとネオリベラル・インスティテューショナリズムについてもこのような指摘がされている。確かに一見したところ両者の主張は似通っている点もあるが、根本的な点でこの二つの理論は異なる。この両者の違いについては以下を参照。Robert Jervis, “Realism, Neoliberalism, and Cooperation: Understanding the Debate,” *International Security*, Vol. 24, No. 1 (Summer 1999), pp. 49-50.

（2）同一理論のなかの論争としては、リアリズムにおける攻撃的リアリズムと防御的リアリズム、リベラリズムにおけるネオリベラル・インスティテューショナリズムと古典的リベラリズム、コンストラクティヴィズム内部の問題などがあり、このような理論内部の相違点が、最近の国際関係理論の論争の構図を複雑なものとしている面もある。

（3）当然、リアリズムに対してもこのような批判が存在する。Jeffrey W. Legro and Andrew Moravcsik, “Is Anybody Still a Realist?” *International Security*, Vol. 24, No. 2 (Fall 1999), pp. 5-55.; Richard Ned Lebow, “The Long Peace, the End of the Cold War, and the Failure of Realism.” in Richard Ned Lebow and Thomas Risse-Kappen, eds., *International Relations Theory and the End of the Cold War* (New York: Columbia University Press, 1995), pp. 23-56. 彼らはリアリスト達が扱う分析対象が広がりすぎていて、何がリアリストであるのか曖昧になっている点を批判している。

（4）Wendt, “Anarchy is What States Make of It,” pp. 419-22.

（5）Rey Koslowski and Friedrich Kratochwil, “Understanding Change in International Politics: The Soviet Empire’s Demise and the International System,” in Lebow and Risse-Kappen, eds., *International Relations Theory and the End of the Cold War*, pp. 127-65.

（6）Robert Herman, “Identity, Norms, and National Security: The Soviet Foreign Policy Revolution and the End of the Cold War,” in Peter J. Katzenstein, ed., *The Culture of National Security: Norms and Identity*

in World Politics (New York: Columbia University Press, 1996), pp. 273-75.

(7) リアリストが主張するように、ゴルバチョフの認識変化の前提にはソ連の相対的な衰退という物質的要因が存在する。これについて説得力のある論議がされていないこともコンストラクティヴィズムの抱える問題点である。ウォルフォースが示すとおり、コンストラクティヴィズムに依拠した研究の結果が、パワーや能力の分布といった物質的要因を中心とした研究とさほど異なったものではないことがそれを証明している。William C. Wohlforth, "Realism and the End of the Cold War," *International Security*, Vol. 19, No. 3 (Winter 1994/95), pp. 91-129.

(8) リアリズムの合理性前提については、コヘインの主張が受け入れられている。コヘインは、古典的リアリズムの中核前提を、①国家中心の前提、②合理性の前提、③パワーの前提、という三つの前提に整理した。Robert O. Keohane, "Theory of World Politics: Structural Realism and Beyond," in Keohane, ed., *Neorealism and Its Critics*, pp. 164-65. なお、ウォルツは、自分の理論において合理性は前提とされないと『国際政治の理論』の中では述べているが、実際の理論枠組みにおいては、合理性が前提されているも同然である。Waltz, *Theory of International Politics*, p. 118.

(9) アメリカの学会全体が、第二の論争以降、行動科学（Behavioral Science）的な理論に傾倒していたのは事実であり、理論を科学的に考えないものは、理論家ではないという風潮が支配的であったのも事実である。

(10) See, Miles Kahler, "Rationality in International Relations," *International Organization*, Vol. 52, No. 4 (Autumn 1998), pp. 919-41.

(11) リアリズム、リベラリズムそれぞれの思想的な伝統については以下を参照。Doyle, *Ways of War and Peace*. E・H・カー（井上茂訳）『危機の二十年　一九一九―一九三九』（岩波文庫、一九九六年）。

(12) Helen V. Milner, "The Assumption of Anarchy in International Relations Theory: A Critique," *Review of International Studies*, Vol. 17, No. 1 (January 1991), pp. 67-85.

(13) たとえば、国際システムの性質が根本的に変化してしまい、国際関係に競争的な要素が皆無になったとしたら、そのときにはリアリズムの有効性はなくなり、古典的リベラリズムの現実世界への適用性が飛躍的に高まることとなる。

(14) わが国における近年の国際関係理論研究は以下を参照。山本吉宣「二つの戦後と国際政治学」『国際問題』第四八一号（二〇〇〇年四月）、四―二八ページ、鈴木基史『国際関係』（東京大学出版会、二〇〇〇年）、ならびに『国際政治』第一二四号の特集「国際政治理論の再構築」の所収論文。